

# [講演要旨] 東日本大震災津波と貞観津波における浸水域に関する検討

相原淳一\*(東北歴史博物館)・高橋守克(前多賀城市文化財課)・柳澤和明(東北歴史博物館)

## § 1. 調査目的・方法

今回改めて東日本大震災津波浸水域に関する宮城県砂押川中流域の調査を行い、あわせて多賀城城下とその周辺における貞観津波に関わる堆積物と伝承について検討した。

## § 2. 調査成果

現地調査の結果、これまで言われていた以上に、津波は砂押川・勿来川・原谷地川の河道を遡上していた。また、河道を通じ、人工的な構造物—水門、道路側溝、水田の水路などを通して、さらに遡上し、場所によっては越水している箇所もあることが確認された。逆に、面的な浸水域も幸い堤防が破堤に至らず、津波の氾濫を免れた地域も存在することを知った。実際に歩いて調査をしてみると、人工的な環境の関与する津波浸水の境界域が極めて広汎に存在していることが判明した。

今回の調査所見に基づくと、多賀城城下における古代のイベント堆積物 (A) 類型 (図 2 ☆ 海水性種珪藻を含まず、津波堆積物ではない) は、旧砂押川の川筋付近に広がっている。一方では、津波堆積物とその後の洪水によって押し流されてしまった可能性や貞観以前の洪水堆積層である可能性も否定できず、津波との関係は不明とせざるを得ない。時期不詳ながら市川では津波によって大船も航行した大河が小川になってしまったという伝承や、八幡から上流へと漂着神(浮八幡神社、図 1 砂押川中流域の調査

南宮神社、利府八幡宮 = 漂着地は図 1 ▲ 付近) が到達したという伝承が残されている。(B) 類型 (図 2 ★ 海水性種珪藻が僅かながら認められ、海からの影響を否定できない) は、旧砂押川右岸近くから約 180m 離れた多賀城城下の人工的な施設の堆積層中の一部にイベント堆積物が残されている地域である。左岸側の城下については不明である。多賀城城下から南方の (C) 類型 (図 2 ■ 珪藻の外洋性種完形殻が含まれ、沖合い海水の流入関与が推察された。海水は津波の遡上によりもたらされたとする解釈

も否定し難い) は、標高 2.05m の湿地帯・水田跡に面的に広がっている。今回、除塩事業の行われた高崎～八幡の水田地帯の様相に類似している。さらに南方の (D) 類型 (図 1 ● 淘汰の良好な砂の薄層) は、より低い 0.6m の低湿地に広がっている。この付近に存在した潟湖はすでに埋積を完了している。八幡からさらに南の今回海砂が直接覆った地域の様相に近い。以上 4 類型 4 地域に分けられる。

## 引用参考文献

- 相原淳一・高橋守克・柳澤和明 2016「東日本大震災津波と貞観津波における浸水域に関する調査—多賀城城下とその周辺を中心に—」『宮城考古学』18 宮城県考古学会
- 菅原大助・箕浦幸治・今村文彦 2001「西暦 869 年貞観津波による堆積作用とその数値復元」『津波工学研究報告』18 東北大学
- 多賀城市教委 2004a『市川橋遺跡』多賀城市文調報 74
- 多賀城市教委 2004b『市川橋遺跡Ⅲ』多賀城市文調報 75
- 藤井久 2014「1号馬周辺堆積物中の珪藻化石群衆」『山王遺跡Ⅵ』宮城県文調報 235
- 松本秀明ほか 2013「仙台平野七北田川下流域の潟湖埋積過程と土砂流入時期」『日本地理学会発表要旨』84
- 松本秀明・伊藤晶文 2014「七北田川下流域の地形変化と山王遺跡」『山王遺跡Ⅵ』宮城県文調報 235
- 箕浦幸治・山田努・平野信一 2014「山王遺跡多賀前地区、市川橋遺跡八幡地区にみられるイベント堆積物の堆積学的・古生物学的検討」『山王遺跡Ⅵ』宮城県文調報 235
- 宮城県教委 2014『山王遺跡Ⅵ』宮城県文調報 235
- 宮城県教委 2015『山王遺跡・市川橋遺跡の調査』宮城県文調報 238
- 渡邊偉夫 2002「伝承から地震・津波の実態をどこまで解明できるか」『歴史地震』17 歴史地震研究会

図 2 砂押川中流域の古代イベント堆積物検出遺構

